

ACT of LOVE

過酷な現実が珠玉のアートに結実するまで

さまざまな素材を用いて、アメリカの歴史、人種、暴力の問題に触れる彫刻やマルチメディア・インスタレーションを制作するアーティスト、キャロン・デイヴィスは芸術の癒やしの力を信じている。彼女の人生は、その何よりの証拠だと語る。創作の根底にあるもの、喪失、強さをめぐる対話。

By Marlene Sørensen



ショービズ界の有名人の両親のもとに生まれ、2015年に32歳の若さで亡くなった著名な画家、ノア・デイヴィスの妻でもあるキャロン・デイヴィス。個人的かつ政治的である彼女の大胆なアートは、アメリカの現代アート界に一石を投じてきた。著名なキュレーター、ジェフリー・ダイチは今年、自身のギャラリーで開催したデイヴィスの展覧会「No Good Deed Goes Unpunished」を「私がこれまで見てきた新進アーティストのなかで最高の展覧会だ」と称賛した。デイヴィスは現在ロサンゼルスでスタジオを、10月にニューヨークのLGDRで開かれる次の個展に向けて制作中だ。彼女は思慮深く、気さくで、インタビューに数分遅れたことを詫言った。

——調子はどうですか？

「さっき足首をひねってしまって、遅れてしまいました。ダンス中にね。ああ、この老体！ 最近、46歳になったんです。この年でまたバレエやモダンダンスを始めると、大変だということがわかりました。

でも50歳に近づいたところだし、人生最高の体形でいたいんです。なので、今やるしかないと思って」

——子どもの頃、ダンサーになりたかったと聞きました。今度のニューヨークでの展覧会はバレエがテーマですね。そのためあって、また踊っているのですか？

「作品は自分の体験から生まれることが多いのですが、今回のようなことは初めてです。ダンサーの世界にどっぷり浸かりたかったんです。けがをしたり、湿布を貼ったり(笑)」

“姉が16歳のとき、母と姉は交通事故に遭いました。母は助かったけど、姉は助からなかったんです。私は当時11歳でした。姉は偉大なキャリアを歩む運命だったのに”

PHOTOS: BRIGITTE LACOMBE COURTESY OF THE ARTIST AND WILDING GRAN GALLERY



「Double Dutch」 2020年 The School | Jack Shainman Galleryにて行われたキュレーター、ヘレン・モールズワースによる展覧会「Feedback」展の展示風景。

——展覧会のタイトルは「Beauty Must Suffer」。あなたの母でバレリーナのナンシー・ヴェリーンがよく口にしていた言葉です。

「ダンサーは、たとえ体が苦しくても完璧でいなくてはなりません。私たちは仮面をかぶっていて、その仮面の裏では誰にも見えない肉体的、精神的なことがたくさん起きている。この展覧会は、私の母



「Lounging Nude No.1」 2022年

とスターの素養を備えていた姉のナジャに捧げたものなので、このようなタイトルにしました」

——「備えていた」と言いましたね。彼女はこうされたんですか？

「姉が16歳のとき、母と姉は交通事故に遭いました。母は助かったけど、姉は助からなかったんです。私は当時11歳でした。私はより一層、ダンスに打ち込みました。とても真剣に。ポワントシューズを履いて帰ってきて血まみれの足を見ると『私には向いてない。姉は偉大なキャリアを歩む運命だったのに、その夢は叶わなかった。私は今日も彼女と母のために踊っている』という気持ちで」

——お母様は2019年に亡くなりましたが、そのとき「Beauty Must Suffer」のコンセプトは、頭のなかにありましたか？

「私は何年もの間、ダンスについての何かを作りたいと思っていました(沈黙し、涙を拭う)。ちょっと感情的になってしまいますね。母の誕生日が近くて、母のことをよく考えるんです。母が恋しい。そう、彼女は準備に立ち会ってくれたし、ヌレエフに関する本をくれたし、展覧会の一部となるポワントシューズを集めるのを手伝ってくれた。そうでなくとも、ダンスは常に私の作品に影響を及ぼしていると思います。例えば、彫刻の位置や姿勢に」

——石膏で彫刻を作っていますね。以前は彫刻に着色していま▶

“父が（ブラックパンサー党の共同創設者である）ボビー・シール裁判記録のレコードを持っていたので、彼の話を知りました。聞くとゾッとします。そしてとてもタイムリーです。ジョージ・フロイド事件が起こったとき、ボビーの彫刻はとくに完成していました。そしてこのような事件は、今日でも起こり続けています”

したが、今は白いままの作品が多いです。なぜでしょう？

「黒人の表現に欠けていると思うものを表現するために、古典的な、白い彫刻として提示しています。空白を埋めていると言ってもいいかもしれません」

——「No Good Deed Goes Unpunished」展では、ブラックパンサー党のボビー・シールの裁判をテーマに取り上げましたね。強制的に拘束される演出は、まるで映画のセットに入り込んだようでした。

「映画や演劇を学んだことは、私がどのように物語を語るのかということや、舞台的な演出、特殊な照明セットなどに影響を及ぼしているのは確かです。映画と違うのは、それがずっと続くということ



「Stairway to Heaven」2019年 2023年に開催された「Karon Davis: Selections from the Hammer Contemporary Collection」展の展示風景より。



ダンサーをテーマにした最新作。

す。ここでは、人々はその瞬間に立ち止まる。私の父（ブロードウェイのスター、ベン・ヴェリーン）が裁判記録のレコードを持っていたので、ボビーの話を知ったんです。聞くとゾッとします。そしてとてもタイムリーです。ジョージ・フロイド事件が起こったとき、ボビーの彫刻はとくに完成していました。そしてこのような事件は、今日でも起こり続けています。私たちアーティストにとって、そしてみんなにとって、歴史を保存し、伝えることはとても重要なことなのです」

——作品では人種差別、学校での銃乱射事件、難民の窮状などを取り上げています。痛みを伴う作業ですが、そこから遠ざかる瞬間はありますか？

「ボビーの彫刻は長い間ガレージに置いてありました。ようやく完成したとき、あまりにつらかったので、テキーラを何杯か飲まなければいけなかったほどです。私はいつも、展覧会に対する人々の反応に少し神経質になっています。『No Good Deed Goes Unpunished』展はショッキングな内容でした。でも私は真実を見せたいのです。ときどき、自分でさえ不快になります。そして疲れ果て、自問自答する。これは結局、あまりにも個人的なことなのだろうか？」

——最初の展覧会は、あなたのパートナー、ノアの深刻ながんを主題にしたものでした。特に、病院の待合室をモチーフにした作

品は、このような待合室で吉報を期待したことのある人なら誰もが自分自身を重ねることができる、きわめて個人的なものでもあります。「当時はお金もなくアーティストとしてキャリアを積めるかどうかわかりませんでした。でも、何かが私に言ったんです。『あなたがとてもオープンであれば、負けることはないと思われる。あなたは苦しみを受け止め、それを他の人に示すものに変えるのです』と」——あなたのスタジオは、かつてパートナーとともに設立した「The Underground Museum」の中にあります。彼はあなたの作品にどのような役割を果たしていますか？

「彼はずっとここにいます。床には彼が残した絵の具の跡があります。私はいつも彼に質問するんです。夫は、私がアーティストとして成功することを私より先に知っていました。『君は大成する。君は

世界と分かち合える何かを持っている。僕は君を信じている』とね。インタビューのときに両親のことを話さないことは、私にとって常に重要でした。彼らの名前を出さず、自分で作り上げたかったんです。ノアが亡くなったとき、私は突然外に放り出され、悲しみのなかでインタビューに答え、美術館の運営を続けなければならなかった。それはとても怖かった。今でもそうです。でも、自分の芸術が人々に感動を与えていることに気づく瞬間がある。そして、それがアーティストとして望むこと。つまり、誰かの心に語りかけることなんです」

「Beauty Must Suffer」10/12～12/23, Salon 94(ニューヨーク)

KARON DAVIS

キャロン・デイヴィス：1977年、アメリカ、ネバダ州生まれ。石膏やワイヤー、ガラス、既製のプロダクトなどを用いて彫刻やインスタレーション、絵画を制作。歴史、人種、暴力の問題を想起させる作品は、近年アメリカ国内外で評価を高めている。



インタビューに登場する「Bobby Seale and The People's Free Food Program」(2021)。ジェフリー・ダイチでの「No Good Deed Goes Unpunished」展の展示風景より。

PHOTOS: COURTESY THE ARTIST AND SALON 94. PHOTO BY ELON SCHOENHOLZ. KARON DAVIS: SELECTIONS FROM THE HAMMER CONTEMPORARY COLLECTION. INSTALLATION VIEW, HAMMER MUSEUM, LOS ANGELES, FEBRUARY 11—APRIL 9, 2023. PHOTO: CHARLES WHITE. COURTESY OF THE ARTIST AND JEFFREY DEICH GALLERY